

る。ただ、この地方の総弁務官でクラブの世話役でもあるマグレガーは、「現地人を黒ん坊呼ばわりするのはやめた方がいい」(38頁)とたしなめる見識はもっていた。

そこへ、材木商社の支店長の姪エリザベスが、パリでの生活に行きづまりその叔父夫妻の誘いに乗って、はるばるやってくる。彼女も現地人について「所詮は隷属人種で、顔の黒い劣等人種でしかない」(154頁)と思っていた。オーウェルは「外国に来ると、大抵の人が現地人を馬鹿にすることで、溜飲を下げものだ」(同)とイギリス人の尊大な心理を捉えている。ちなみに、エリザベスは「ビルマの風習、ビルマ人の性癖を常に好意を持って語」(153頁)る、顔に痣のある主人公フローリを袖にし、最後にはマグレガーと結ばれる。

ところで、アメリカ映画『42 世界を変えた男』(2013年)も、肌の色による差別をテーマにした作品である。モチーフは本書と通底している。

戦後まで大リーガーには白人選手しかいなかった。初の黒人大リーガーとなったのが、背番号42のジャッキー・ロビンソンである。チームメイトの中で、黒人とは一緒にプレーしたくないとの嘆願書が作成される。相手チームのピッチャーはジャッキーの頭を狙って投げってくる。相手チームのランナーが一塁手のジャッキーのふくらはぎをスパイクで踏みつける。さらに、極めつきは相手チームの監督がベンチ前に出て打席のジャッキーに、「ニガー」などととも口に出せない差別語を容赦なく浴びせかける場面だ。

ジャッキーはこれらを強靱な精神力で耐え抜き、プレーで差別をねじ伏せていく。まさに背番号42の背中が無言で雄弁にアピールする。それを理解したチームメイトが、敵地に乗り込んでの試合開始前に「全員42番を着れば違いが分からない」とジャッキーに語るシーンが感動的だった。こうして、毎年4月15日は大リーグの全試合で全選手が背番号42をつけ、背番号42は大リーグ全球団の永久欠

番となる。

片や、サッカーJリーグの試合で、「JAPANESE ONLY」の横断幕を観客が掲げる事件があった。2014年3月10日のことである。横断幕を掲げた観客だけが特殊な人びとなのではなからう。異なる人びとを「分けて」排除して蔑む意識は、私たちの中に根深く潜んでいるのではないか。オーウェルが当時のイギリス人の現地人に対する感情を描いたように。しかも、その意識は今日の「格差社会」の鬱憤晴らしとして広まり、深化しているという気がしてならない。

本書では結局、最有力候補だった医師のヴェラスワミが腹黒い治安判事補のウ・ポ・チンの策略もあって失脚させられ、ウ・ポ・チンが現地人としてただ一人の白人クラブのメンバーに選ばれることになる。ただし「運命の鉄槌を受けきれぬ胃などあるはずもなかった」(374頁)。栄えある総督の表彰式から3日して、ウ・ポ・チンは脳卒中で急死する。オーウェルは「運命とは結局、片手落ちに終ることはないものである」(247頁)とも記している。

有頂天になっているときがいちばん危ない。この万古不易の教訓を要所要所でこの小説は差し挟み、私たちを戒めてくれる。ここにも『ビルマの日々』の「新しさ」がある。

- ・文中敬称略。
- ・『ビルマの日々』からの引用は、大石健太郎訳(彩流社、1988年)による。
- ・〔 〕は筆者による補足説明である。

『ビルマの日々』に見られる「動物」表象に関心を抱いて

山口 梓

ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-50) の処女長編小説『ビルマの日々』(Burmese Days, 1934)を一読してすぐ気が

つくことは、ビルマの熱帯林を舞台にしているため当然ではあるが、野生動物に関する描写やエピソードが頻出することである。雄馬、海亀、キリギリス、鰐の他、蛇、犬、猫、鳩、水牛、豹などの動物や昆虫そして魚類などを用いた比喩表現も多出する。イギリス人も現地人も多種多様な動物に喩えられている。しかも、主人公ジョン・フローリ (John Flory) にまつわる動物の比喩表現や動物に関係するエピソードが、彼の人生での重要な出来事と密接に関連し、最終的に自殺にいたる彼の運命を暗示するように構築されている。多彩で豊かな動物描写や比喩表現に着目し、ロバート・リー (Robert Lee) やジェフリー・メイヤーズ (Jeffrey Meyers)、ダグラス・カー (Douglas Kerr) などの先行論を繙き、『ビルマの日々』における主人公フローリと「動物」表象」(『英文学研究: 支部統合号』第6巻、2014年)という論文にまとめた。以下に論文の概要を記してみたい。

最初に、犬の比喩表現を取り上げ、その機能を分析した。白人クラブのボーイ長などの現地人の使用人階級の人々は、ほとんどが犬に喩えられている。ロバート・リーも指摘しているように、現地人が白人に対して従順さや隷属を示していることを強調する際に「犬」の比喩表現が用いられているのである (Lee 163)。しかし、白人でも犬に喩えられている登場人物が一人いる。フローリである。彼は、自分を不甲斐ない卑怯な野良犬に喩えている。フローリは野良犬が月に向かって遠吠えしているのを聞き、銃で野良犬を撃とうとする。このとき彼は自分自身のことを「野良犬」に喩え、白人クラブで現地人の友人ヴェラスワミ (Veraswami) に対して取った自分の卑怯な態度、裏切り行為を自己批判する。フローリが自分自身を「野良犬」と呼んで自分を罵倒するこの場面には、彼の現地人に対する共感と同情が、さらにはイギリスの植民地支配に対する怒りと嫌悪が秘められている。続いてフローリは再びライフル銃を取り上げ、遠吠えしている黄色い野良犬に向かって発砲す

る。野良犬に銃を向けるということは、自分自身に銃を向けるということであり、この場面は、小説の結末でのフローリのピストル自殺を暗示している。

黒い小型スパニエル犬フロー (Flo) のエピソードも示唆的である。フローリは自殺する前に愛犬フローを撃ち殺し、自殺の道連れにする。フローの名前がフローリの名前の一部をとって名付けられていることから明白のように、愛犬フローはフローリの分身である (Lee 8)。愛犬フローは、「見知らぬ東洋人にはいつも吠えていたが、ヨーロッパ人においては好きだった」(84)と描写される。フローリの分身フローは、フローリの表面上は隠されているが、しばしば浮上してくる現地人に対する曖昧な気持ち、すなわち、偏見、不信任感、いらだちを明示する役目を担っている。表面的には隠されているが、フローリの現地人に対する否定的な感情を、オーウェルは「におい」を用いて表現していると言える。

次に、フローリとイギリス人女性エリザベス (Elizabeth Lackersteen) との出会いの仲立ちとなった水牛にまつわるエピソードを分析した。水牛のエピソードは、二人の関係が破局に向かうことを暗示しているが、スペースの関係で詳細は省略する。鳩と豹のエピソードも示唆的である。フローリは、超然として空高く飛び、下界に降りてこない、美しく繊細で孤独を愛する緑色の鳩に、現地の白人の中で孤立し誰にも理解されずに孤独に暮らしている自分自身を重ね合わせている。しかし、ある日フローリは、エリザベスが彼と同一視していた大鳩を撃ち殺してしまう。この行為もまた、小説の結末のピストル自殺を暗示している。豹にまつわるエピソードでは、フローリは、エリザベスに頼まれて雄の豹を仕留め、狩りの記念に皮をはいでなめし、彼女に贈る。しかしこの豹の皮は腐ってしまい、悪臭を放つ存在となる。フローリは、悪臭を放っているのが自分自身であると感じる。豹のエピソードもまた、フローリが死ぬべき運命であることを示唆している。